パワフル伯耆まちづくり推進協議会　御中

平成 26 年度
都市農村共生・対流総合対策交付金事業
活　動　報　告

（担当業務：子供農山漁村交流に係るプロジェクトの総括企画）

2015 年 2 月 28 日

東京都渋谷区神宮前 5-52-2 青山オーバルビル 14 階
特定非営利活動法人　元気な日本をつくる会
須　田　憲　和

【目的】

パワフル伯耆まちづくり推進協議会が「平成 26 年度都市農村共生・対流総合対策交付金」の事業を実施する上において、都市部親子に需要があり、伯耆町の魅力が伝わるような「パワフル伯耆キッズ」育成プログラムの企画・開発・運営を行う為に以下の業務を実施した。

① プロジェクトの全体統括・プロデュース業務
② プロジェクトの業務設計指導
③ 協議会・イベントにおけるアドバイザー業務

【報告書について】

当該業務に係る活動（プロデュース・アドバイス・各種指導等）の成果として、協議会およびイベントに、内外から一定の評価を得る事が出来たと考えている。本書では、創意工夫を凝らした内容について、活動内容を振り返る形により、ポイントを交え報告させて頂きます。

【業務遂行の留意点】

都市農村交流においては、全国で様々な取り組みがなされているが、いずれも一過性の物となりやすい傾向が否めない現状がある。主催団体の金銭的および人的リソースの不足が主な原因であるが、個人と個人をつなぐという従来の手法ではなく、将来的には地域と地域を結ぶ活動に育てなくては継続性が担保できないと考える。無論、交流促進イベント自身も魅了あるものでなければ、移動交通費等を全額負担してでも参加したいという物にはならない。

新しい交流促進モデルを構築する為に、今回、農林水産省よりの補助を頂いた経緯もあり、他の模範となるよう、地域の各種団体や事業者、特には、まちおこし活動を行っている方々との連携、大学との連携により、新たな仕掛けと取組みを行う事に留意した。

また、運営主体である「パワフル伯耆まちづくり推進協議会」は昨年２月に新規設立した団体であり、まちづくりを目的に有志が組織しているが、当該業務についての企画・運営等において外部者のアドバイスやアイデアが必要な状態であることもあり、協議会の人財育成や運営も含め、本業務の遂行の一環として、指導を行う事とした。

会議等の企画検討時における合意形成の取り方やアイデア促進、進めかたについて、時にはアドバイザーとして、また、時には、ファシリティターとして提供した。活動のＰＲや運営者のモチベーションを上げる為、新聞やテレビといったメディアを多用する事も不可欠であり、私の運営している元気な日本をつくる会が発刊している「パワフルジャパン第６号」においても、本取組みの一部を掲載し、全国 1700 ヶ所の首長へ直送するなど、幅広く活動をＰＲすることもできた。

【　目　次　】

● 活動履歴・・・・・・・・・(個人情報含むため当サイトでは削除)

● 収穫イベント・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ3 ～ Ｐ4

●【都市農村交流イベント】
2014 年 8 月 23 日（土）から 25 日（月）・・　Ｐ5 ～ Ｐ13

●【都市農村交流イベント】
2015 年 2 月 7 日（土）から 8 日（日）・・・　Ｐ14 ～ Ｐ17

● メディア対応について・・・・・・・・・・・　Ｐ18 ～ Ｐ19

● まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　Ｐ20

【　収穫イベント　】2014 年 8 月 3 日

都市農村交流促進イベントの企画検討を進める中で、企画自身は関係者の協力を得て立案する事は可能ですが、運営スタッフの当日の動きについては、不慣れな点もあると想定できたため、都市農村交流促進の一環として、事前に運営体験をすることで、運営手法とリスク管理などを習得することにしました。

まずは伯耆町の子供を対象としたイベントを小規模に実施し、課題の洗い出しと８月２３日から予定しているモニターイベントに対する準備を行いました。

パワフル伯耆まちづくり推進協議会（収穫イベント）

2014 年 8 月 3 日（日）、伯耆町にてトウモロコシの収穫体験と交流会を開催しました。

あいにくの雨でしたが、19 人の小学生に参加頂きました。

収穫したトウモロコシは、この後のバーベキューで食べる予定ですが、待ちきれない子供たちは、その場で皮をむいて、新鮮なトウモロコシを食べ、「とれたては甘くておいしい！」と喜んでおりました。

普段は見慣れているはずの地元の子供達でも、このような体験に喜んでいる姿をみることができ、自然とのふれあいや農作物に対する感動を覚えてくれる事に気づけたのは大きな意味がありました。

次に東京からお連れした佐野青子先生によるワークを用いた交流会を開催。

参加した子供たちは思いのほか、先生のお話しに集中して聞いていました。ワークの内容や声の張り方、子供達への目配せなどに対するノウハウを、スタッフも実感することができましたので、今後の推進に対して、意味のある機会となりました（人財育成）

グループワーク。伯耆町（ほうきちょう）の「ほ」から始まる言葉を多く書き出したチームが勝ち！

ゲーム性（競争）をもたせると、見ず知らずの子供同士でも（学年が違っても）すぐに協力してできる。このプログラムは、また参考にして使わせて頂きたいと思います。

交流会が終わった後は、地元食材を用いたバーベキュー。
まちづくり活動の難しさはＰＲにあることから、地元ケーブルテレビに事前に取材交渉をし、取材に来て頂く事ができました。
　新聞やテレビに掲載されると、参加者や運営者といった当事者のみならず、地域の方々からも、「見たよ」とか「こんど誘ってよ」とかの声掛けを頂ける機会が増えます。
　●ポイント：当事者においても、自分たちの取組みが掲載されることでモチベーションが上がると共に、公開されるという事に対する責任感と緊張感をもった企画や運営をしなくてはいけない。という事を実感できたと考えます。

終わりには参加者からアンケートを頂く事で、反省と次回の企画に活かすという形をとりました。
開催後には、イベント実施に伴う反省を実施

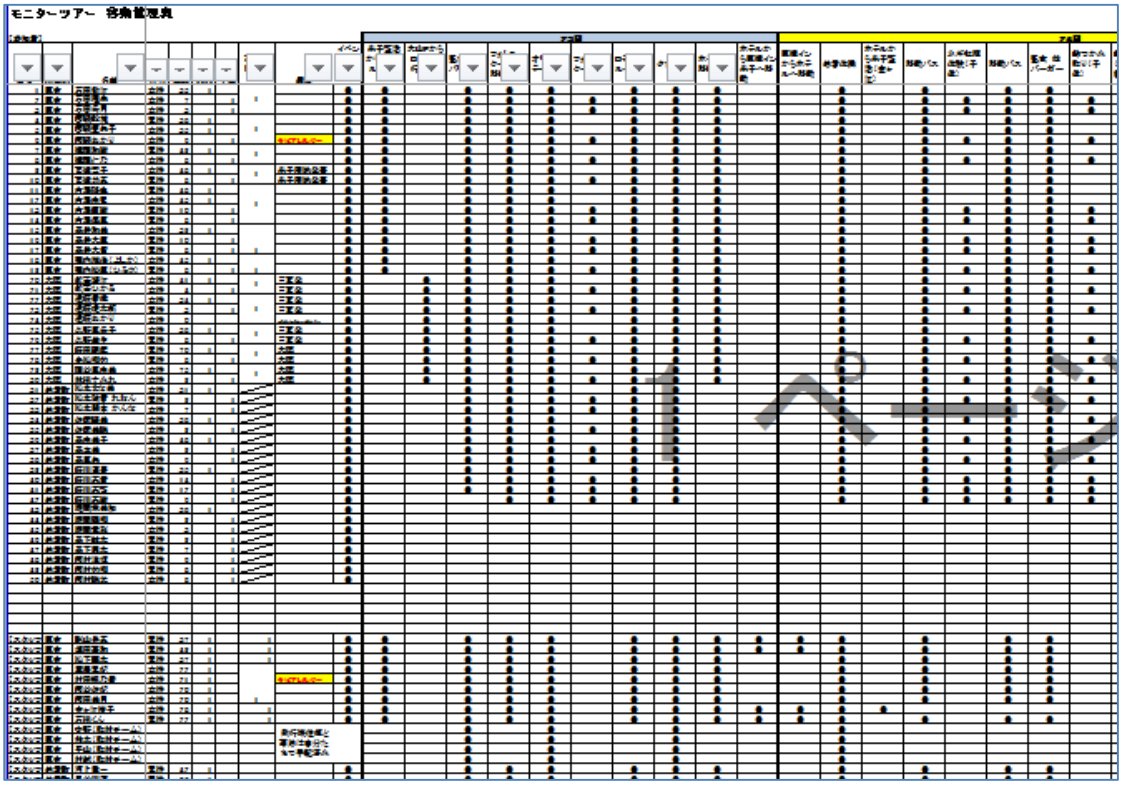
【都市農村交流イベント】2014 年 8 月 23 日（土）から 25 日（月）

鳥取県伯耆町内にてパワフル伯耆まちづくり推進協議会　都市農村交流イベントを開催
鳥取県伯耆町の親子に加え、東京・大阪・神戸の親子が２泊３日のイベントに参加頂きました。

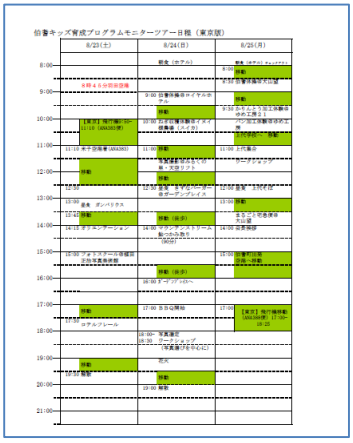
　イベント企画を考案した後、当日の運営において参加者の管理とスタッフの管理を徹底する必要があることから管理表を作成。

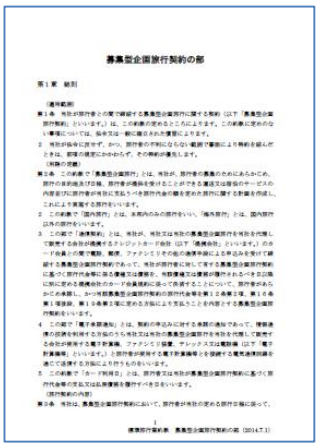
●ポイント：参加者名（スタッフ含む）の情報と、イベントごとの参加予定および移動に伴う工程を明確にすることで、スムーズな運営ができるように心がける。イベント実施中に、次のスケジュールを把握すると共に、万が一の変更にも迅速に対応できるよう、スタッフ全員が把握する。

移動管理表の作成



　募集要項とチラシの作成にあたっては、単なる民間事業者のモニターツアーではない為に、内容表記を慎重に行う。





●ポイント：本事業は農林水産省の交付金事業であることを明記する為に公的な側面も持ち合わせる為、誤解をまねく文言は避けると共に、関係者への無用な問い合わせや意見が来ないように配慮する。また、宿泊を伴うツアーである為、旅行業法に抵触しない形で、関係者の意見を聞いて進める事。
　参加者およびスタッフの情報は個人情報に該当するので、厳格な管理運用をすること。食事を提供する場面もある為に、アレルギーを事前にヒヤリングして、該当者向けの食事メニューを一部変更するなどのきめ細やかな対応が必要である。

■2014 年 8 月 23 日（土）　天候　曇り時々雨。
11：30　米子空港にて、地元チロル観光のお出迎え。
●ポイント：受入れ側としては、おもてなしと敬意を表するという意味も込めて、空港内で紙による案内看板を持ち、参加者を誘導する。

12：30　大山ロイヤルホテルにて受付と開会式を開催
　●ポイント：最初のイベントは印象に残りやすいことから、地元の名所となる施設で実施すると共に、以後の参加態度にも影響を与えるので、できるだけ格式高く行う（だらだらしない）

13：00　ビアホフ　ガンバリウスにて昼食と伯耆町の森安町長からの挨拶。伯耆町ケーブルテレビジョンと日本海新聞に取材頂きました。
　●ポイント：行政との連携は必須であり、首長に参加いただき挨拶して頂く事で、首都圏からの参加者も地元の参加者も当事業が公の物であるという認識を付ける事ができる。また、首長自身にも、当該活動を実体験して頂く事で、今後の活動支援や助言を頂きやすい関係を行政側と構築することができる。

14：20　植田正治写真美術館　　金ヶ江悦子先生（2010 年ミス・インターナショナル日本代表）のオリエンテーション
東京・大阪・神戸・伯耆町の子供達で初めて一緒に取り組むオリエンテーション。金ヶ江先生の補助として実践女子大学の学生さん 4 名にも協力いただきました。

簡単なゲームでお互いに体に触れる事で、一気に親近感が増しました。

●ポイント：最初のオリエンテーションは、参加者がこれからの数日間を他人と一緒に過ごすのに大事な部分になります。とくに都会と地方の子供達が仲良くなる「きっかけ」をつくるという事に終始します。今回は、全国の子供が熱中している「妖怪ウォッチ」のテーマソングを流すことを提案したことで、みんなが歌い始め、一気に距離が近づいたという実感を得る事ができたと思います。

15：10　植田正治写真美術館　　フォトスクール

写真美術館が小学生向けに行っているフォトスクール。子供たちにカメラの使い方を説明した後、各自 1 台ずつ、手渡しして敷地内の気になるものを撮影。その後、みんなで品評会を開催。ここでの勉強により、ツアーの 3 日間、カメラで写真を撮っている子供が多く、写真を撮る喜びを感じていました。今回のサブテーマとして「記憶を記録に」というお題目を設定していましたので、思いのほか意識が高くなったと思います。

カメラの取り方を学んだあと３０分ほど、部屋を出て、自由に撮影。
品評会での合格ラインをあらかじめ説明。

　戻ってきたら先生による評価会がはじまりました。各自の写真を投影し、気になるものをクローズアップして、ポイント説明や合格をだしており、子供たちも自分の写真を評価されて感動と喜びを感じていました。

子供達が実際に撮影した写真例。

●ポイント：地元の施設名所をプランに入れる事は多いと思うが、ただ単に「見る」だけの行為は観光に過ぎない。ゆえに、施設側との事前協議や協力要請により、なんらかの「体験」ができるプログラムを入れる事が必要であり、まさしく「記憶を記録に」という概念も取り入れる事が出来たと考える。

天空リフト（ナイト営業）
あいにくの霧で街は見えませんでしたが共に夜を過ごすことが出来て、親睦が深まりました。

●ポイント：夜という時間帯は、親睦にはきわめて有効な時間帯であることを認識すべきである。今回は子供たちを対象とした物であるが、たとえ一時でも、夜をみんなで楽しむというプログラムを入れる事で、印象に残る内容が感動に代わるきっかけとなることを実感できたと考える。

■8 月 24 日（日）　天候　雨時々曇り。
2 日目は全員、「伯耆キッズ」Ｔシャツを着用して一体感を出しました。

●ポイント：知らない者同士が一体感をもって生活を共にする為には、言葉や理屈だけでなく、身に着ける物を同じにすると、効果が倍増する。また、グループ意識が醸成されるため、単独行動を慎むという効果も期待できる。　さらには、大人数で町中を移動する事から、外部者からの注目も得やすくＰＲ効果も大きい。という事を体得できたと考える。
　昨今、まちおこしの一環で「地域のご当地体操」が人気化する傾向が各地に見受けられるが、他人任せでなく、作詞・作曲・振り付けを自分たちで行い、検討と改善を繰り返して作り上げる過程にこそ、まちづくりに必要なコミュニケーションや完成時に得る満足度を経験することができる。結果として生まれた「ほうき体操」は、地域活性化のツールとして、町を含めた行政組織と共に普及拡大を目指していきたい。

9：00　伯耆体操　　伯耆（ほうき）と箒をかけたクリーンをテーマにしたストレッチ体操。
楽曲と歌詞、振り付けをオリジナルで作成し、初披露の場となりました。子供の耳に残りやすいリズムと言葉になっていますので、子供たちはツアーの各所あらゆる場面で、口ずさんでいました。
講師は協議会監事の森さん（カーブス等のショップを経営）

10：30　ネギの収穫体験
鳥取の伯耆町ネギについて、協力いただいたネギ農家の乾さんに説明を頂きました。
個々でとれたネギは大阪や東京の首都圏にも出荷されています。ネギを取ったあとの持ち方も教えて頂きました。

●ポイント：多くの子供達が一斉に作業に入るので、幅広く子供に目配せし、戸惑っている子がいないか注意する。合わせて、屋外の作業である為、体調を崩す子（動きが散漫）がいないか注意する。もし、調子が悪そうな子を見つけたら、すぐに近寄り、休憩をすすめ、待機させているスタッフの車中にて冷房をつけるなどして様子を見る。待機者がでた場合には、必ずスタッフがそばにいて様子を見る事。

12：30　昼食　　「大山鶏ひたひた大根バーガー」昨年度の全国ご当地バーガーフェスティバルで 5 位入賞。モスバーガー特別賞も受賞した伯耆町地元の若者中心に企画推進しているバーガーを頂きました。今年度に開催されるバーガーフェスティバルで出品予定の「ねぎバーガー」も試食させて頂きました。

大雨の影響（大雨警報発令）により、川での鮎つかみ体験を急遽変更。子供用簡易プールを用意して鮎のつかみ取り体験をすることになりましたので、準備時間を確保する為に最終日のグループワークを先に実施しました。

●ポイント：屋外イベントを中心に企画していたが、雨天の場合の対応策についても検討・準備をしておくことで、急な天候変化にも対応できる体制を用意しておく。

ワークショップ　「伯耆町のキャッチコピーを考えよう」
これも 3 チームに分けて考えました。　前日のフォトスクールで子供たちが撮影した写真を何枚かデータにし、大学生のＩＰＡＤにいれたものを見ながら、どの写真にするか、どういう言葉をキャッチフレーズにするかをチームごとに考えて、最後は代表者がみんなの前で発表しました。

●ポイント：多くの子供が作業に入ると、すでに慣れ親しんでいる事もあり、集中力が途切れ、ふざける子が出てくる。作業については子供数人に対してスタッフをチームに入れ込み、一人ひとりの行動に目を向け、話しかけ、集中が切れないようにする。

アユ掴みの疑似体験として雨天時用に用意した簡易プールに鮎を放流し、掴み取りの体験が出来ました。

夕食　　大山ガーデンプレイス。掴み取りした鮎をバーバキューで焼く体験。まずは下準備として塩を塗り付け。

昼も収穫したネギもバーベキューです。
食べ終わったころ、スイカ割を楽しみました。
●ポイント：できるだけ子供の発想にもとづき自由に作業をさせるが、火に近い場所での作業となる為、各コンロに一人づつのスタッフを配置して、事故がないようにする。

都会・地方に限らず、最近あまりやらなくなった「スイカ割」を体験。自由と自然を満喫。

●ポイント：参加しない子供（控え目な子）が出るのでスタッフが声をかける。列の割り込みや２回、３回とやりたがる子がいるので、スタッフは規律を守ることを教える場面でもある。

■8 月 25 日（月）　天候　雨時々曇り
8：00　大山ロイヤルホテル出発
8：30　伯耆体操（道の駅　大山望のレストラン

地元企業の「パン工房」と「かりんとう工場」の二手に分かれて工場見学をさせて頂きました。

かりんとう工場

パン工房

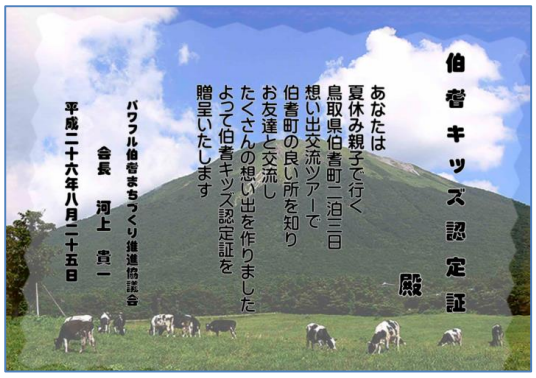
上代　　廃校を利用した農家レストランにて社長から伯耆町についての歴史や特徴を教えていただき、「自家製そば」を旧校舎内で頂きました。

●ポイント：廃校の再利用については、今後の行政施策においても重要課題であり、学び舎として利用していた施設を生まれ変わらせて利用する姿を実際に見て、体験してもらう事で、将来の新しい想像力に寄与するきっかけを提供。

「伯耆キッズ」の子供達をメッセージビデオ形式で撮影。加工して Youtube に掲載予定。

●ポイント：参加者のメッセージビデオを作成。個々人が感想を述べる姿を撮影しビデオを作成。感想を発表する体験をすることで、自己表現についての意識を高める。と共に事業のＰＲ効果を狙う。

閉会式（伯耆キッズ認定書交付式）
3 日間の日程を終了したことで、鳥取県伯耆町の魅力に触れる事ができ、他の地域の子供達とも仲良く出来た事で、「伯耆キッズ」の認定書を交付。



最後に河上会長から、参加の子供達へ宿題を出しました。

●ポイント：参加者へ認定書を交付する事で、イベントに区切りをつけ格式をもたせると共に、将来において実施する交流イベントにおいても同様の認定書を交付し、継続性をもたせると共に、参加したという当事者意識をもたせ、満足度と感動を与える。

●ポイント：イベント開催中に気づいた不手際や改善点は、遅くても３日以内にまとめる事が必要。全員でのまとめが出来ないときは、個々人において反省点備忘録を作成し、共有する事で次回の企画に活かす。

【都市農村交流イベント】2015 年 2 月 7 日（土）から 8 日（日）

前回は 8 月 23 日（土）から 25 日（月）の 2 泊 3 日で実施しましたが、参加者が日程調整しづらいという状況でもありましたので、今回は 1 泊 2 日でのイベントを企画しました。更に、夏イベントに参加頂いた東京の実践女子大学の学生にも前回の反省を踏まえ、参加いただくと共に地元の鳥取県農業大学にも声掛けし、学生さんにスタッフ側として参加いただき、新たな連携が出来ました。

【開催日】　平成 27 年 2 月 7 日（土）から 8 日（日）

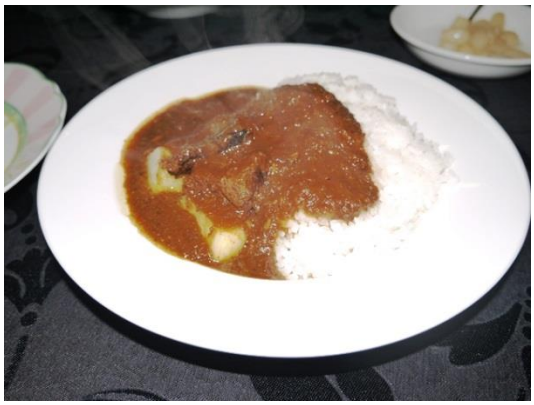
【場　所】　鳥取県伯耆町

【モニターイベント名】「鳥取県伯耆町。冬に親子で雪満喫（大山の雪原を自然観察しながらウォーキング！とっとりお肉三昧、和牛・豚・鶏を食べ尽くす！）

★今回のイベントも、伯耆町の森安町長から歓迎のご挨拶を頂きスタートしました。

●ポイント：交流促進事業には、必ず受入側の首長にも挨拶だけでも参加頂く事が重要であり、早めに首長のスケジュールを押さえて頂くように、役所と早い時期から調整を図ること。

「リストランテ天空」にて、全員そろっての食事。リストランテ様のご厚意により、レストランでも初めて伯耆和牛を使った創作カレーを作って頂きました。(好評につきメニュー化されるか可能性もあります)



●ポイント：イベントは、地域内の事業者（店舗）等と連携するきっかけとなる。イベントの趣旨を理解いただければ、協力して頂ける経営者も多い。更には、地元食材を使った新メニューを共に開発するなど、想像以上の協力を得られたことで、今後も連携して地元食材の開発や販売協力も可能となる

★次に、前回の夏イベントで初披露した「伯耆体操」を今回も実施。（ＣＤデビューの準備中です）

前回は参加者全員にオレンジ色のＴシャツ（ほうきキッズデザイン）を用意しましたが、今回は冬ですので、共通のニット帽（ほうきキッズデザイン）を着用頂きました。

●ポイント：前回の夏の時に、全員に同じＴシャツを配布した時の効果が大きかったので、今回も参加者に同一の着用物を配布。今後も「伯耆キッズ」のロゴ・デザインは変えない形で統一性とブランド化を図る。

★午後からは、みんなでかまくらづくり。

伯耆町の子供たちは、普段から雪を見慣れているのですが、首都圏の子供達以上に雪を楽しんでいた姿をみて、主催者側も次につながる新たな気づきを得る事が出来ました。

●ポイント：子供が一斉に活動する為、スタッフは共に遊ぶのではなく、安全管理を第一に接する。行動範囲が広いため、全体の動きを見渡す立場のスタッフ（総合リーダー）を任命配置することが必要。（活動エリア外に出てしまう子や、危険性のある場所へ入り込むことを事前に防ぎ、近くにいるスタッフに指示をする。

★２日目

スタートはいつも通り、「伯耆体操」からスタート。

今回は３組に分けて、どの組が一番上手にできるか、楽しそうにできるかを競いました。

●ポイント：昨日も実施したが、同じことを行う時は、踊るだけではマンネリ化してしまう為、競技形式や発表形式をとることで、楽しめる仕掛けを導入。

伯耆体操は、東京の実践女子大学の学生が、みんなをリードします。

★次は雪山を散策する「スノーウォーキング」
地元のＴＶ局にも声掛けし、取材頂きました。

プロのガイドと共にチームに分かれて雪山の中を散策し、自然に触れ合います。
●ポイント：雪山への侵入は、予想以上の自然環境を学ぶこともできるが、想定外のトラブルに遭遇する可能性があるので、スノーウォーキングのプロと事前に打ち合わせを行い、安全管理を徹底する。

★　お昼ご飯。伯耆町を中心とした食材を提供し、自由に焼く体験をしました。
（黒毛和牛・豚・鶏・ネギ・原木しいたけ等）

★次は鳥取県農業大学の学生さん達によるワーキング。農業についてのお話しと共にクイズ形式によるワークを行いました。学生さんのトークが上手で、子供達も多いに盛り上がりました。

●ポイント：学生は参加者の子供たちに年齢も近いことから「お兄さん」「お姉さん」という感覚で親近感を覚えやすい存在である。学生にとっても子供との接触は新鮮であり、地域人材育成の為の良いきっかけとなる。

★東京の実践女子大学の学生さんによるワーキング。

初日の食事あとのワークで伯耆町の名物を塗り絵した紙を伯耆町マップに張り付けました。　これは、「きずなっぷ」と名付けられ、交流事業の一つとして役場などで紹介して頂く予定です。

●ポイント：活動においては、常に、「目で見える物・形に残る物」を意識して企画する事が重要であり、当事業のＰＲや将来における普及活動を行う上で、このような成果物の蓄積が大きな財産となる。

★最後は二日間とおしての表彰式

夏におこなった交流イベントに引き続き、今回も全員に「伯耆キッズ認定書」を交付しました。

★実践女子大学の学生さんが、ほうきキッズの交流キャラクターを、即席で作成してくれました。

次回からのイベントや伯耆体操のキャラクターとして、利用していきたいと考えています。

日本海新聞（2014 年 9 月 2 日）

日本海新聞

体いっぱい自然満喫

都会の親子が体験ツアー　伯耆

関東や関西などで暮らす親子らが伯耆町の魅力を感じる体験型ツアーが23日から25日まで、同町内で行われた。参加者は体いっぱいに豊かな自然や食を満喫した。

同町の農商工観光の各分野の有志が、町の振興を図ろうと立ち上げた「パワフル伯耆まちづくり推進協議会」（河上貴一会長）が「想い出交流ツアー」と銘打って企画、町内をはじめ東京や大阪、神戸から45人が参加した。

初日は、地ビールレストラン「ビアホフガンバリウス」（同町丸山）で、地元食材を使ったメニューを堪能。同町の森安保町長が「いろいろな体験を通し人生が豊かになる楽しい思い出を作ってほしい」と歓迎した。

一行は2日目からは、一体感を出すためそろいのオレンジ色のTシャツを着用。植田正治写真美術館（同町須村）や大山まきばみるくの里（同町小林）見学、ゆめ工房（同町大殿）でパン作りを体験した。

交流ツアーで地元食材を使ったメニューを味わう参加者

小学生の息子2人と参加した東京都小金井市の森井和美さん(39)は「自然体験がとても楽しかった」と話していた。（足立篤史）

山陰中央新報（2014 年 12 月 12 日）

この人

「パワフル伯耆まちづくり推進協議会」事務局長

長谷川　満さん

町の「これだ」をつくる

伯耆町の飲食店経営者や農家らがことし2月、地域の活性化策を練る団体「パワフル伯耆まちづくり推進協議会」を発足させた。事務局長として会を引っ張る広告代理店社長の長谷川満さん(36)は「町の豊かな資源を生かしきれていない。『伯耆町と言えば、これだ』という魅力を見つけ、つくり出していく」と語る。

（米子総局報道部・陰山篤志）

—どんな団体ですか。

「農や建材、農業、ホテル、飲食、美容などさまざまな業種の経営者ら約20人でつくる。20～40代が中心の若い団体だ」

—どういう思いで設立したのですか。

「観光面のPRができていない。南部町と間違えて『柿の種を飛ばすところ?』と聞かれる。特産を聞かれても思い浮かばない。にもかかわらず、米子市に近いためにそれなりに人が訪れるから、高速道路の延伸で町が通過点となるといった危機感が薄い。従来、町の人たちはまとまって動くことがなかったが、地方が厳しい状況に向かう中、連携して地域活性化のために動く必要性を感じた」

—特産の白ネギは、米子でも栽培が盛んです。伯耆町から望む大山も、町だけのものではない。これというものが、確かにまだ見あたらないかもしれません。

「そうだ。『伯耆町と言えば、これだ』というものをわれわれの手で見つけ出す。あるいは一からつくり上げていく。難しい取り組みだ。だが、そうだからこそ、やりがいもある」

—どんな活動に取り組んでいますか。

「観光面の対外発信に力を入れている。8月に東京や関西の小学生約30人を伯耆町に招いた。地元の子どもたちと一緒にネギ農家で収穫体験をしたり、アユのつかみ捕りをしたりした。都会の子どもは見るものすべてが新鮮に映ったようだった。大山の魅力を味わってくれたと思う」

—町外から流入する人口を増やしたい。

「そのためには、まずは地元が町の魅力を再認識する必要がある。住民が自分の町を愛していないと、外に発信できない。協議会では、地元の魅力を掘り下げた機関紙の発行を考えている。町のよさを売り出そうと、伯耆と箒をかけた『ほうき体操』も考えた。曲と歌詞はオリジナルだ。体操の中に掃除の動きを取り入れ、ホームセンターなどで曲を流してもらえるよう働き掛ける」

—子育て環境の充実にも力を入れるそうですね。

「子どもを預けて遊ばせられる場所が少ない。来春をめどに、託児の機能を持った施設を町内に開きたい。育児相談に乗る担当者も置く。母親が子どもを安心して預けて、くつろげる場所をつくる」

はせがわ・みつる　伯耆町大殿出身。米子市内の広告代理店勤務を経て、2012年に広告代理店「[illegible]」（同町大殿）を設立した。松江市の人気ラーメン店のCMなどを手掛ける。同町大殿。

都会の親子が伯耆の冬満喫

雪をテーマに体験型ツアー

関東や関西など都会で暮らす親子らが伯耆町の魅力に触れる体験型旅行が7、8の両日、同町内で行われた。雪をテーマにした体験プログラムで、参加者は体いっぱい〝伯耆町の冬〟を満喫した。

ツアーは、同町の農・商・工・観光の各分野の有志が、町の活性化を図ろうと立ち上げた「パワフル伯耆まちづくり推進協議会」（河上貴一会長）

●ポイント：新聞社への取材依頼は、あらかじめ趣旨と日程を伝え、一番取材してほしい部分や取材内容についても明確に伝える。取材に応じて頂けないときは、自分で記事を作成し、写真を添えて後日、掲載のお願いをする。（この手法により、上記３つ目の囲み記事が掲載されました）

元気な日本をつくる会の季刊誌に掲載。

全国 1700 ヶ所の首長（知事、市長、町長等）へ無償配布（2014 年 12 月）

地方自治体の首長への配布により、行政課題である交流人口拡大についての相談や反響があり、農林水産省の行う都市農村交流促進事業についてのＰＲも実施。

※平成 27 年度の当事業においても、採択された時には、夏に実施予定の交流促進イベントの特集を掲載予定。

●ポイント：私が当季刊誌の作成責任者であることから、他自治体への参考となる施策・モデルを発信していきます。

ま　と　め

今回の業務を通じて、多くのアドバイスやアイデア支援をさせて頂きましたが、私自身も実践を通して多くの学びを得たことに感謝申し上げます。

地方自治体の抱える課題は多岐にわたり、地方創生に取り組む上では、定住促進による人口増や産業創出による雇用確保など多くの施策が各地で展開される事となります。
しかし、そのいずれも、行ったこともない地方に移住するとか、地方拠点を移すという発想には結びつかない為、なんらかのきっかけや縁が必要となります。

すべての基本は交流人口の増大であり、地方への人口分散であると考えるならば、今回の農林水産省による「都市農村共生・対流総合対策交付金事業」は、まさしく日本の将来を担う施策であると考えます。
交流促進事業に必要なことは継続性であります。
その為にも個々人による企画運営ではなく、地域の組織力を用いて運営する事が要求される訳ですが、これも単独組織ではなく、行政や学校、地元企業や宿泊施設、観光施設、そして地域貢献活動をしている様々なグループとの連携が必要となってきます。
今回の企画では産官学連携による組織づくりにも貢献できたと考えています。
それぞれの団体は、目的も違えば考え方も違いますし、使えるリソースも全く違いますが、地域による社会貢献活動に参画したいというニーズは確実にあります。
これからも様々な団体組織と連携し、多くの知恵や力を結集した組織をつくると共に、公共性をもった活動を展開して頂きたいと考えています。

大学との連携は、両者にとって大きな成果が見込まれますが、学生は４年で卒業する為に、学生個人ではなく、学校や大学のゼミ等との提携を模索することが必要です。大学にも地域貢献に対するノウハウが構築できると共に社会貢献活動をする事で、付加価値をつけ、他の大学との差別化を図ることもできます。

本事業を企画する段階において、多くの方々の支援を頂いた事に感謝すると共に、その結果、実施した内容については、適宜、アイデアやポイントを入れ込んでおります。（各実施報告項目の中で概要を赤字にて記させて頂きました）

当該事業の指導・実務にあたり、本報告書の項目に記載していない部分も多くありますが、他の委託者が提出する報告書についても、事前に企画構成や監修をさせて頂いております。

以上、平成 26 年度　都市農村共生・対流総合対策交付金事業に係る業務支援についてのご報告とさせて頂きます。今後もパワフル伯耆まちづくり推進協議会の運営には引き続き支援させて頂きますので、宜しくお願い申し上げます。